

心と身体を育む環境

「遊ぶ環境」作りはまず身近な大人が遊ぶことから



富山大学・福井大学非常勤講師 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊代表 早川 隆志

抄 録

筆者は1983年富山県・八尾町の山里に民家を購入し、子どもが自由に遊べる場「子どもイタズラ村」を作った。長年「イタズラ村」の運営に携わった筆者は、子どもが自由に遊べるようになるためには「大人（スタッフ）が真剣に遊ぶこと」が重要であり、子どもたちは一緒に遊んでくれる大人に心を開き、素直に甘え、本音を明かすということを学んだ。つまり、「一緒に遊ぶこと」により、基本的信頼関係が構築されるのだ。また、不登校や発達障害などが多く発生する背景には、子どもとの間に「遊び関係の欠落」があると確信した。

筆者は、子どもの遊び環境の復活を願い、「NPO法人 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊」を2004年に創設した。デジタルな遊びが子どもの生活を席卷する中、親子関係や人間関係の希薄さやねじれによる「愛着関係」不全など、育児環境の変化が「発達障害」に代表されるような子どもの精神病理に影響を与えているのではないかと考えるに至った。

赤ちゃんは生まれて間もなくお母さんの気持ち＝穏やかな情緒、晴れやかな気持ち、無表情や暗い気持ちまで＝を敏感に感じ取る力が芽生える。親子の感情の交換作用で生まれる「間主観性」や「甘え」の環境が、子どもたちの安定した心を養い、外界への探索行為ができるようになる。不安定な交流が多くなれば赤ちゃんも、イライラしてトゲトゲする。そうした子どもたちの「甘えたくても、甘えられない」心理状態が、「発達障害」と深く関わっていることも分かってきた。子どもは親や家族に甘えることにより、安心してありのままを出せるようになる。「間主観性」や「甘え」こそが「安全基地」が形成していく。

赤ちゃんが「言葉」や「社会的参照」を獲得し、「9カ月革命」を成し遂げるために重要なことが「三項関係」だ。三項の一項を「対象」から「遊び」と置き換えると、この難解な専門用語が、身近な親や保育士の育児行為として見えてくる。しかし、「遊び」が若い世代に伝承されていない中、大人が子どもと遊べる「力」を養う必要がある。そこで、筆者はNPOの事業として、「遊びのワークショップ付き講演」を提案し実施している。大人の「遊び力」を呼び覚ます遊びが「皿回し遊び」だ。大人も夢中になって遊べる皿回し遊び。それによって生まれる「感性」が「子ども力」だ。子どもと一緒に遊べるようになると、大人自身も日頃の仕事の疲れが癒される。また、子どもがかかえている「悩み」や「苦しみ」の中身が感じ取れたりするようになる。そうなれば、子どもは大人に信頼を寄せるようになり、一方で大人は子どもが抱える問題の糸口が見えて来るようになるだろう。

子どもと一緒に遊べる親や保育士（教師）が、「発達障害」や「不登校」や「いじめ」などの課題を抱える子どもに向き合い、よい結果を生みだしてきた。

キーワード：大人が子どもと遊ぶ、遊び力、子ども力、三項関係、安全基地、皿回し遊びワークショップ

I. 「遊び力・子ども力」の発想と根拠

いじめ、不登校、虐待、発達障害、犯罪……。子どもたちの不幸は日々の暮らしから「遊び」がなくなったことから始まっている。親とのじゃれつきや仲間とのイタズラ、そして地域での交流体験が、子どもたちの生きぬくための力の源泉となっていた。それらをことごとく奪われてしまった子どもたちは根っこも生やせず社会に浮遊しているかのように筆者には映る。スーパーでお菓子をねだって暴れる子、通学路を朝10時過ぎにとぼとぼと学校に向かう小学生、電車の中でスマホを離さない高校生……。この子どもたちは5年後どのようなようになるのだろう。果たして彼らはしっかりとした大人になれるのだろうか？不安が走る。元気な姿で遊ぶ子どもを見ていてすら、彼らの未来を思うと、恐ろしくなることがある。

筆者は「大人こそが『遊び力』と『子ども力』が必要だ！」と常々訴える。多くの人々は「えっ 何で？」と反応する。「なぜ大人になってからも遊ばなくてはいけないの」ということだろう。筆者が言いたいのは、大人になった心身にも「子ども性（子どもらしさ）」は存在するし、それを呼び覚ますことで、今の子どもたちの危機を救うことができなかと考える。その根拠についていくつかの観点から述べる。

(1) 「子どもらしさ」の回復と「少年時代」の蘇り

佐伯ゆたかは「なぜ、今、幼・保・小の連携か～「子どもらしさ」の回復～」でアーウィン・シンガーの「心理療法の鍵概念」（誠心書房 樋幹八郎訳 1976年）を引用し、「子どもらしさ」について言及している。「子どもらしさ（childlikeness）」はいわゆる「子どもっぽさ（childishness）」（思慮が浅く、衝動的で、自分勝手に、他人への配慮がないなど）ではないと前置きし、アーウィン・シンガーの考える「子どもらしさ」とは、「精神的に健康で安定した人間の特性として、①物事へ熱中、②不確実さに進んで挑戦する、③世界の不思議さへの驚きを受け入れる、④矛盾や葛藤を多様な発想で乗り越える、⑤他者の言葉をまっすぐに聞くなどの性質」と紹介している。

続けて、佐伯は「このような「子どもらしさ」は子どもの「遊び」の中でよく見られるものである。しかし、小学校に入り、中学校に進学するころから衰え始め、高校・大学へと進むにつれてほとんど見られなくなってしまふ。（中略）しかし、ごくわずかな『オトナ』が、『年齢に関係なく』その『特性』を持ち続けることができる。NHK番組の『プロジェクトX』で取り上げられるような『地上の星』たちの生きざまは、子

のような純粋な探求心に溢れたものであると言えよう。恐らく、彼ら、彼女らは、あらゆる困難にもかかわらず『おもしろがって』没頭し、自らの理想や目標の実現に向けて『放っておくわけにいかないこと』に取り組み続けたに違いない。」と述べ、『年齢に関係なく「子どもらしさ」を生涯に亘り持ち続けられるように、子どもを育てることが重要だと説く。

ベストセラーとなった「ハリーポッターと賢者の石」を翻訳した松岡佑子は、読売新聞のコラム「子どもの領分」で、「心の芯に残る『少年時代』」と題し、こう書いている。「そのとき私はロンドンの小さなホテルの一室に座っていた。三十余年連れ添った夫を失い、借金を抱えた小出版社を引き継いで一年。同時通訳者として頑とした基盤を築いてはいたが、出版人としても、翻訳者としても経験のない素人だった。その私が、無名の新人、J・K・ローリングが書いた魔法使いの本の虜になった。『生き残った男の子、ハリーポッターに乾杯！』ここまで読み進んだとき、体中に震えが走った。少女のころに味わったあのワクワクする空想の世界が一度に蘇って来た。一晩で一気に読み、私がこの本を翻訳する運命なのだと感じた。そして、次の朝には著者の代理人と著作権交渉を始めていた。私を突き動かし、力を与えてくれたものは、子どものときと同じ「素直な感動」だった。

人は心の芯に子どもの心を残しながら成長していく。そして、その芯が、ときには強いエネルギーを発する。（中略）子どものときを振り返ると、子どものときにもっていた素晴らしい力に気付く。そして、大人になって見失っていたものに気づく。夢を見る心、ひたむきに没頭する力、感動する心。大人の心の芯に残っている『子ども』が、ときとして大人を突き動かす。」

佐伯は大人になるにつれて「子どもらしさ」は消滅するといい、松岡は「子ども」は心の芯に残っているという。しかし、どちらも内なる「子ども」が大事だということを主張している。

大人が「皿回し遊び」という「ワークショップ」に出会い実践しながら、大人の身体と心に「遊び力」を培い、子ども時代の記憶を蘇らせる。そして、「子どもらしさ」＝「子ども力」も取りもどすことができる。これが、筆者の考える「遊び力」と「子ども力」という実践的概念である。

(2) 「じゃれつき遊び」の発見～抱っここちょこちょ遊びの威力～

筆者が「子どもイタズラ村」（1983年～2008年）で実践した遊びの中でとても印象に残っているのは、ス

スタッフと子どもたちが、部屋に布団を敷き詰めた「リング」で闘う「プロレスごっこ」である。とっ組み合い、けり合い、投げ合う。子どもたちは夜になると「プロレスごっこやろうよー」と、この遊びをせがんだ。夏や冬などの長期休み中の合宿での遊びの定番。とても荒っぽい遊びだったが、遊びが終わると、子どももスタッフも日常で抱える重荷を吹っ飛ばしたかのように、晴れやかな表情をしていた。(※「明日の遊び考」早川たかし著 久山社刊) 筆者が「じゃれつき遊び」を重視する背景にはこの体験がある。

「じゃれつき遊び」は、今から30年前から「さつき幼稚園」(宇都宮市)で、朝の30分間、園長をはじめ保育士、子ども、お母さんが入り交じって行われてきた。創立当初は園庭で「冷水まさつ」を実施してきた。しかし、寒さが厳しくなる11月ころになると嫌がって服を脱がないのだ。そこで、室内で先生が大はしゃぎしながら子どもを追いかけ回したり、飛びついて来る子を抱き上げたり、おんぶするなどの「じゃれつき遊び」を始めた。当初は、「冷水まさつ」の準備運動のようなもので10分間行った。「じゃれつき遊び」を始めると、子どもたちの中に様々な良い変化が現れたのだ。礼拝のときのおしゃべりがなくなったり、イライラする子やすぐキレる子どもが落ち着いてきたり、課題に集中できるようになったりしたのだ。その後、厚いマットレスや毛布などの補助用具を取り入れ、園長や理事長がガキ大将になって走り回る朝30分間の今の形になったという。

これはNHKの「クローズアップ現代」で紹介された。筆者は「イタズラ村のプロレスごっこと同じだ」と感動した。園長は「じゃれつき遊びをすると、すぐにキレる子や活気のない子どもが、目がキラキラし元気になる。」と、実践の成果を述べていた。「じゃれつき遊び」は、「脳をきたえるじゃれつき遊び」(学研 園長・野尻ヒデ 理事長・井上高光 正木健雄著)で、実践のまとめが行われ、理論化されている。

身体心理学や健康心理学を研究している山口創氏(桜美林大学教授)は臨床発達心理士として、親や保育士からの子どもに関する相談にもかかわる。氏は多くの調査や相談を受けた内容から、肌と肌の触れあいや皮膚を通して感じる様々な刺激こそが、子どもの心や身体の育ちに必要だと唱える。著書「脳は抱っこで育つ」(廣済堂出版)の中に書かれた興味深い研究を紹介している。

「160名の高校生と保護者に協力してもらい、衝動的に攻撃しやすい傾向と乳児期のスキンシップとを調査しました。結果は予想通り、乳児期にスキンシップの

足りなかった子どもは高校生になって衝動的に他者を攻撃しやすい傾向が高いことが分かりました。(略)アメリカの心理学者であるジェームズ・プレスコットも多くの非行少年たちへの調査から『身体への触れあいの不足は、抑鬱や自閉的な行動、多動、暴力、攻撃、性的逸脱などの原因になる。(略)』

紹介した2冊の本に共通した思いがある。「脳をきたえるじゃれつき遊び」には、「じゃれつき遊びの基本」,「脳は抱っこで育つ」では、「やってみよう 遊びながらのスキンシップ」というカット入りの遊び方の例が載っている。それらの本に書かれた思いは、「日常生活の中で、親子で遊ぶことは、誰でも身体ひとつと気持ちがあれば簡単にできる!」ということだ。そして、一緒に遊べば、子どもたちに確実な変化が起きるとのことだ。

(3)「かわいがりずむ」～一緒に遊ぶと分かる、見えてくる子どもの心～

筆者は、子育ての情報が氾濫する中、創設したNPOの指針を分かりやすく説明するために「かわいがりずむ」という造語を考えた。「かわいがりずむの子育て支援」。これは慶応大学医学部小児科教室・児童精神科医・渡辺久子氏が筆者の活動への応援メッセージに挿入されていた一文「まず、療育者である者(大人)が、子どもを『かわいい』と思えるようになることから、発達の糸口は見えてくる。」から考えた。学術用語でもなんでもない「かわいい」という子どもを愛おしむ日本語。では、子どもがかわいいと素直に思えるようになるには? 筆者も子育てに悩む親の相談にのってきた。相談を求めて来る子どもたちは、わざと大人の精神を逆なでするような言動をすることが多い。そのような場合でも、その子を「かわいい」と思えるようになることが、「かわいがりずむ」だ。「子どもイタズラ村」での実践から、筆者にもこれならできると思いついたことは、「一緒に遊ぶ」こと。面白く、楽しそうに一緒にただ無心に遊ぶことだった。遊んでいると、遊ぶ表情から子どもの普段見せない一面を伺い知ることができる。遊びが上手くできたときの喜びの表情、上手くできずに悔し涙を流したときの表情など、子どもらしさが表情になって表れる。そんなとき、子どもを「かわいい」と心の底から思える、それが「かわいがりずむ」である。

II. 「一緒に遊ぶ=遊び力・子ども力」支援と「三項関係」理論

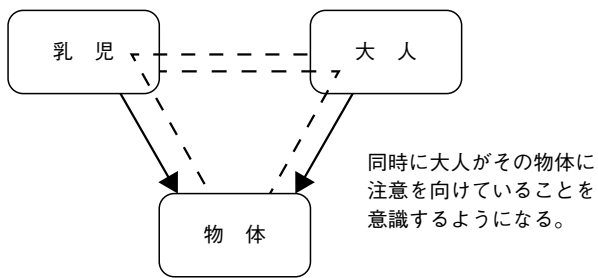
次に、「一緒に遊ぶ」=「遊び力・子ども力」について「三項関係」理論から、また、乳幼児の精神保健

における臨床的課題と結びつけ、その意義について考察する。

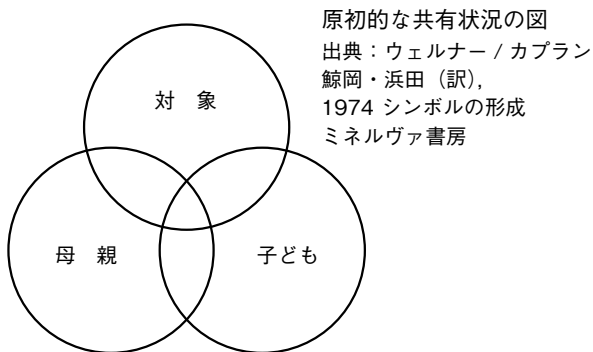
「一緒に遊ぶ」から解る「三項関係」、そして「間主観性」・「甘え」・「安全基地」

三項関係とは、生後約9カ月以後の人の発達には「自己(乳幼児)」と「他者(母親・養育者)」と「対象(モノ・状況)」の三者関係が成立し、それが豊かに多様になることによって形成されていく。その行為例としては視線追従(大人が見た対象物を乳児も見る)や、社会的参照(乳児がある対象や現象に対する評価を大人の表情を見ることで参照にする。(社会的参照=ソーシャルレファレンシング)が見られる。もう一つ重要な行為例に、他者とある対象を共有する「共同注意」がある。このような発達過程は「9カ月革命」とも呼ばれ、社会性・コミュニケーションの発達の重要な指標になる。

学術書などには以下のように図式化されている。



脳科学事典より



発達心理学事典より

この重要な発達が順調に行われるかそうでないかに関わるのが「間主観性」や「甘え」や「安全基地」だ。

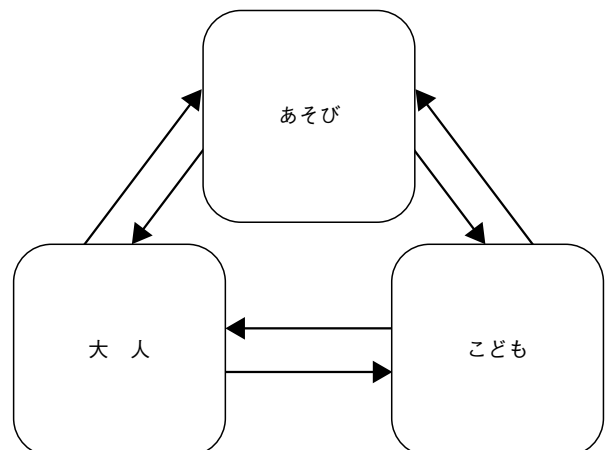
「間主観性」とは主観と主観の「間」、気持ちと気持ちがつながっている性質。赤ちゃんは生まれ落ちたときからこの「間主観性」を備え持つことが、世界の乳幼児精神保健の研究から分かってきた。子どもが親や周囲の大人への思いや感情(好きや嫌い、安心や不安、

快や不快)や、大人の行動や表情の動きから相手の主観を感じ取り、自分なりの情動を返すことだ。大人がいつも安定した心持ちでおれば「共にいる」という情動が生まれ、いつも不安や緊張した状況にあれば、子どもにもその不協和音(不安・緊張・孤独)が伝わる。

「甘え」とは土居健郎によると日本語特有のことばで、その心理は日本人の心性を特徴づけ、依存しなければ生きることができない乳幼児が母親を求める気持ちである。子どもが親の顔色を気にすることなく、安心してありのままの自分を出せて、ほっとできる母子関係が「甘え」。「甘え」が満ち足りていれば、心が安定して自立できる。精神科医・小林隆司氏は自然な「甘え」が成立しない場合、子どもの心の発達が歪んでいき、この歪んだ「甘え」の形の中に「発達障害」の本質が見えるとの事例を発表している。

「安全基地」とはいざというときに頼ることができ、守って貰える居場所であり、そこを安心のよりどころとし、心の支えとすることができる存在だ。そして、外の世界を探索するためのベースキャンプでもある。危険が生じたときには、逃げ帰ってきて助けを求めることができる。このことをメアリー・エインスワースは「安全基地」と呼んだ。

子どもの成長に欠かせない「三項関係」。その基盤となる「安全基地」や「間主観性」や「甘え」。では、「安全基地」や「間主観性」や「甘え」は、どのように形成されるのだろうか。「どのように」と問われると、案外すぐに答られないのではないだろうか。筆者は、「三項関係」の「項」の「対象」(「物体」)を「(一緒に)遊び」に変えて考えるとよいのではないかと考える。



「対象」を「遊び」に変えてみた「三項関係」の図

遊び視線で子どもの居る暮らしを見つめ直すと、「遊び」はどこにでもあると分かる。

- i. 朝起きたら布団の中でプロレスごっこやじゃれつ

き遊び。

- ii. 「台所は遊び場です」と発想を変えると、「お仕事」が「遊び」に変わります。

「小麦粉をこねこね」や「野菜のおなかを切って調べよう」

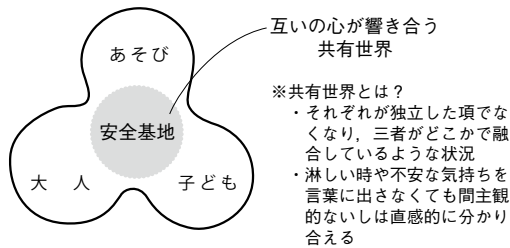
※実は、子どもはお母さんと一緒のお手伝いが大好きなのだ。

- iii. 簡単に作れる「科学おもちゃ」で遊ぼう。

段ボールの空気砲、ヘロンのシャワー、ぎこぎこプロペラ、……。

- iv. 手をつないで朝の散歩。近所を知ることは、社会を知るための第一歩。

「一緒に遊ぶ」関係から描ける「安全基地」のイメージ図。



安全基地のイメージ図
(一緒に遊んでいるときに「安全基地」の役目が機能している)

「一緒に遊ぶ」が生活に根付くと、「遊び」は「三項」の単なる「一項」ではなく、また、時々提供される具体的な「遊び」でもない、何かあれば互いに響き合う心の「共有世界」が形成されていく。それが「安全基地」。

一緒に遊ぶ大人は子どもの表情や顔色を察することができるようになる。喜んだり、集中したり、不思議がったりする子どもの顔をよく見ているからだ。「今日は保育園で嫌なことがあったのかな」とか、「今はしっかり向き合わないといけないな」など、「間主観性」がよく働くようになる。

一緒に遊べば、淋しくなれば、「ママ あそんでー」と、自然に甘えることができる。甘えることが苦手だった子どもも、「あそんでー」だったら素直に言える。遊び上手になれば、甘え上手にもなれる。

一緒に遊べば、子どもは一緒に遊ぶ大人へ信頼や尊敬の気持ちを持つ。遊ぶ大人が好きになり、自然に愛着感情を抱いていく。困ったときに「ねえ、私の話聞いて…」と自然に悩みを打ち明けたり、「このひとがいるから……、しっかり生きよう！」というように「安全基地」が形成されていく。

「三項関係」の一項を「遊び」と変えてみる。「三項関係」という専門的な「発達心理学」がとても身近な「子

育て」の現実世界に降りてくる。「なーんだ、難しく考えなくても、一緒に遊ぶことなら私たちにもできる」と考えられないだろうか。多くの大人たちが、このように考えられるようになれる手だてが「遊び支援」だ。

Ⅲ. 「遊び力・子ども力支援」から生まれる新しいナラティブ

(1) 「子育て支援」の具体的内容として「遊び支援」という分野の確立を！

子ども・子育て支援新制度」がスタートし、地域のニーズに応じた多様な「子育て支援」の一層の充実が課題となっている。「母子関係発達支援」、「家族支援」、「一時保育支援」、「病児保育支援」、「子育て支援室」、「子育て・まちづくり支援」、「家庭連携支援（連絡帳の活用事例）」など確かに多岐にわたっている。しかし、親や保育者や教育者への具体的な「遊び支援」という観点からの支援がないのだ。

心理学者や子育て臨床の専門家たちは「プレイセラピー」や「絵画療法」、「抱っこ法」などの手法を生み出して、確かに成果を上げて来ている。しかし、それは筆者の考える「遊び支援」とは異なる。日々子どもと接している親・保育士・教師たちこそ、「遊び支援」を行うべき立場にいたることが見過ごされている。子どもと「本気で」、「一緒に」遊べる大人になれるための「遊び支援」が、今こそ必要だと私は考える。

しかし、子どもと密接にかかわる若い大人たちの多くは「子どもと一緒に遊ぶことの楽しさを知らない」という現実がある。「たかいたかい」や「いないいないばー」や「おなべふ」や「おうまさんばっかばっか」などの「遊び方」も知らない。「親になったら誰でも子どもと遊べるようになる」と一般的に思われているが、これは間違いだ。若い世代に意識的に「遊び」をしっかりと伝承していかなければならない時代に突入しているのだ。

筆者はこれまで、若い親や保育士、教員を対象に、「遊びのワークショップ付き（子育て支援）講演」を500回以上行ってきた。講演の中に、「皿回し遊び」や「サソリの標本」や「ふれあいマッサージ」など不思議で奇抜な大人でも楽しめる「遊びのワークショップ」を取り入れた。大人たちの心は子ども時代に戻り、子どもと一緒に遊んで、遊ぶことの大切さを実感する。「講演に参加すると、子どもと一緒に遊びたくなり、実際に遊んでみると、子どもとの良好な関係が築かれ、子どもが変化する」という感想をいただいていた。このように、「大人たちの子どもへの姿勢や向き合い方が変わるように手助けする」ことこそ、筆者が提案する



「遊び支援」である。

「遊び支援」とは、保育所や児童館内に設けられた「地域支援室の親子遊び」の「空間」があるということではない。そこで、「絵本の読み聞かせ」が行われることでも、木のおもちゃの遊び方を教えてもらうことでもないのだ。

つまり、子どもたちが息づく暮らしの場（家庭、地域、乳幼児施設、学校）で、子どもたちと関わる身近な大人が「一緒に遊べる」ことが、子どもたちの健全な成育に繋がる、ということをおぼえてはいけない。

（2）心のケアとしての「遊び力・子ども力」

心を病む大学生の変化から～生まれる新しいパラダイブ～

富山大学の学生A・Kさんのレポートは、筆者が「遊び力・子ども力」支援の成果を考察し、成果を意味づけるためにはなくてはならない事例となっている。

筆者は1999年より富山大学において総合科目「人権と福祉」の講義を行っている。A・Kさんは2000年に受講し以下のレポートを書いた。筆者はこの時点で、まだ「子ども力・遊び力」という考えはまとまっていなかった。学生を講義に引きつけるための「パフォーマンス」として「皿回しワークショップ」を10分間ほど行っただけだった。この無意識に行っていたパフォーマンスの中に「子ども力・遊び力」の萌芽があったことが伺える。以下のレポートは2002年の講義で提出されたA・Kさん（3年生 女性）が1コマ目の講義の後に書いたものである。

「遊ぶことの大切さを学んで」

講義中に皿回しをすると聞いたとき、一瞬耳を疑いました。それに加え、教室内に見知った人がいない状態で、『ペアを組んで』ということからも、最初は『ああ一面倒だなー』と思わざるを得ませんでした。しかし、皿と棒を手にしてみて、その思いはどこかへ吹き飛んでいました。楽しかったのです。私もペアを組んだ方も皿を完全に回すことはできませんでしたが、それでも何か、これまで忘れていた遊ぶことの楽しさを思い出せた気がして、懐かしさと嬉しさとで、私は皿回しの間中笑顔でいました。（中略）

私は幼い頃から中学生の頃まで何度も転校を繰り返しており、中でも、小学校高学年・中学校に経験した出来事を契機に神経症を発症してしまい、それからは、心を許せる友達もおらず、大学入学とともに症状が悪化してしまい、殆ど休学状態、そして現在は留年1年目も半年にさしかかっています。ですから、正直なところ“遊ぶ”ということに対する想い出は、小学校中

学年からは持ち合わせてはいません。もうこの神経症との付き合いも長いですし、仮に治ったとしても、下ばかり向いて過ごしてきた時間は戻らない・自分はこれからずっと空っぽのまま過ごしていくのだと、将来に希望が持てないままでもありましたし、その無気力さから何かに“心から感動する”楽しいと思う、嬉しいと思う、こういうこと自体ありませんでした。

でも、今回の講義でやった“遊び”小学校のころ友人たちとおもちゃを手作りして遊んだこと、駆け回ったこと、笑い転げたこと、そういう懐かしい想い出がありありと浮かんできて、何かこみ上げてくるものがあり、同時に、自分はまだ何かに感動できる心は失っていないのだと少し安心し、これから生きていく気力がわずかながら戻ってきたように感じます。今まで自分がこれから生きていくべき長大な時間をどうしようかと途方に暮れるばかりでしたが、今後はこの講義での経験を生かし、前向きに立ち向かってゆこうと思います。今回のこの講義を受講できて本当によかったです。

以下レポートはA・Kさんが「人権と福祉」5コマ目終了後に書いた文章である。彼女の心の変化が明瞭に読みとれる。

「最後の講義を聞いた感想」

今後、子どもと関わる（もしかしたら自分の子どもを育てる）機会もあるかもしれません。でも一連の講義を通して、『子ども力』というものを知り、少し理解を深めることができたと同時に、自分の中で色んなことの整理の方向性が少しずつ見えてきたように思います。子どもとの関わり方にしても、自分の身の処し方にも、ここで文章に表すほど簡単ではないでしょう。でも、これから人と関わって生きていく上で、この講義で学んだこと、考えるきっかけを貰ったことを大切にしたいと思っています。短い期間でしたがありがとうございます。

考察

①1コマ目の講義ではA・Kさんは、「一瞬耳を疑いました」とあるように、最初は「講義室で皿回しなど変」と思ったようだ。その後、「その思いはどこかへ吹き飛んだ」、「これまで忘れていた遊ぶことの楽しさ」と記述しているように、「皿回し」という遊び体験を「楽しい」と受け入れた。その瞬間、A・Kさんの心の中に「子ども」が甦った。またペアになった学生と一緒に遊ぶことで、人に対する不信感（「心を許せる友達もいない」）が払拭されたといって良いだろう。これこそ「子ども力」が培われていく過程であると、筆者

は考える。

②A・Kさんは、皿回し遊びを楽しんだことで、子ども時代を思い出した。A・Kさん以外にも、これまでの講義で多くの学生たちがA・Kさん同様、それまでの人生経験を赤裸々に語り始める。(悩みを持つ学生の多くがそうである。父親からの虐待、貧困な家庭生活 アルバイト漬けの日常、一家心中未遂など)講義室で一緒に遊びを楽しむ私への「信頼感」が生まれ、学生たちが心を開いてくれたからに違いない。

③「これから生きていくべき長大な時間を、どうしようかと途方に暮れるばかり」だったA・Kさんは、しかし、5コマ目の講義の後では「今後、子どもと関わる(もしかしたら自分の子どもを育てる)機会もあるかもしれません。」「自分の中で色んなことの整理の方向性が少しずつ見えてきた」、というまにに変化した。彼女の心の中では新しい「ナラティブ(物語)」が描かれ始めていることが分かる。

④「皿回しワークショップ」を共有することにより筆者との信頼関係が成立して行く①～③までの流れは、A・Kさんの心がケアされていく過程である。子どもたちも含め心のケアを必要とする人達は、専門家だけではなく、信頼できる身近な人にケアをしてもらいたいと思っている。「子ども力・遊び力」を身につけ、皿回しをとことん遊べる人なら誰でもできる「皿回し遊びケア」に可能性を感じる。

(3) 悩める教師が学んだ「かわいがりずむ」

2007年夏、28歳の若き女教師H・Mさんがイタズラ村合宿に参加した。富山県教育委員会が定める「6年次研修」があるが、その一環で夏期休業期間中に「3日間ボランティアをする」ことが定められている。その研修のひとつがNPO法人の活動のひとつである「子どもイタズラ村親子合宿」であった。

H・Mさんはクラス運営で悩んでいたが、この研修で「子ども力・遊び力」を身につけ、自身が変わりクラス運営もうまくいくようになった。9月になり礼状が届いた。「この合宿を体験し、教育観や人生観が変わった」と書いてあった。その後、1年間、H・Mさんは私達の企画する「遊び師養成講座」に足繁く通った。その頃のレポートである。

昨年夏の子どもイタズラ村合宿と遊び師養成特別講座「特別支援教育の現状を『子ども力』の観点から展望する」(2008年3月2日)への参加、受講を通し、「自分自身が楽しむこと」、「どの子どもにも“かわいがりずむ”の精神で接すること」の大切さを学ばせて頂きました。

遊酔亭の合宿(2007年8月1泊)では、初め、子どもたちをサポートしようと参加したつもりが、自分自身が一番川遊びや料理作り、薪割り、皿回し、コマ回し等、童心に返り、楽しんでいました。教師になってから、大学を卒業したての頃は、よく休み時間ごとに子どもと遊んでいましたが、最近では、色々な事務や雑務に毎日追われ、低学年をよく受け持っている私は、連絡帳等のお返事書き等も多く、子どもに「遊ぼう」と言われても「今日はゴメンね」と断ることの方が多くなっていました。しかし、昨年(合宿後)の二学期からは、自分が楽しむために子どもたちと遊ぼうと決めました。

二学期になり、皿回しをクラスに3セット持っていく、休み時間、自由に使うことができました。(もちろん、夏休み中に中級の皿回しができるように猛特訓しました…)らくらく皿回しをする姿を披露した私に、子どもたちから「すごい〜!!!」の歓声。ちょっと優越感にひたりながら、私も休み時間、子どもたちと共に皿回しをして遊ぶようになりました。すると、たくさんの子どもが行列を作るようになり、子どもたちの間で「1分」で交代するというルールを自分たちで決め、タイマーを使って仲良く交代する姿が自然発生しました。

そして、それまでいつも一人ぼっち気味で人との関わりも苦手だったA君も皿回しに熱中するようになり、皿回しがきっかけで友だちとの関わりが増え、友だちにやり方を教えるまでになりました。A君は自分用の皿回しセットを購入し、家でも練習をしていたのです。一人技ができたなら、二人でキャッチ、二人出来たら三人で、というようにA君は自然と息を合わせて友だちと活動することが出来るようになっていきました。皿回しが子ども同士の関わり合う場作りになって嬉しく思いました。皿回しだけでなく、けん玉やディアボロ、独楽、ハブのおもちゃを、クラスにもっていき、共に遊び、笑顔がお互い増してきたように思います。

特別支援講座では、早川先生のお話の中で「教師の“愛”(「かわいがりずむ」)が大切。“指導”ではダメ」という言葉が心に残りました。教師になってそろそろ10年、毎年いろんな個性を持った子どもたちに出会いました。ADHD、アスペルガー傾向を持つ子どもに出会うたび、どんな指導をすればこの子どもたちは過ごしやすくなるのかと、いろんな専門書を読み、こういう個性のあるからこういう支援をしよう、とスキルの動いていた時期もありました。しかし、講座の当日配付資料の中の「特別扱いはいけない」「指導では

ダメ！」という手書きの言葉に、最近自分もつくづくそうだなあ、と思うようになりました。今まで「この子はADHD傾向だから」と自分の中で勝手に診断名をつけ、そうすることで安心してしまっていた己を反省しています。どんな個性をもった子どもでも、特別扱いしないで、その子をまるがかえで好きになり、かわいがるのが大切なのではないかと思うようになってきました。みんなにあわせることが難しい子どもがおり、初めは自分自身がその子に過剰な事前の声かけや安心できるサポートをしていたことがあったけれど、心を鬼にしてみんなと同じことが出来るように厳しくし、「あなたはみんなと同じなんだよ」と伝えるようにしたら、その子に私の心が伝わったのか、援助もいらなくなるくらい変わった子がいました。ただ優しくするだけではなく、特別扱いせず、みんなと同じように接する「かわいがりずむ」の精神でこれからもいければと思います。

早川先生の講座や合宿の後、子どもとくすぐりごっこやじゃれあいを楽しめるようになり「かわいがりずむ」精神で子どもに接することが出来るようになったと思います。貴重な体験を与えてくださった早川先生、奥様、スタッフの方々、本当にありがとうございました。

考察

2007年新学期がはじまった9月初旬、筆者はH・Mさんが勤務するN小学校の校長先生に電話をかけた。「1学期はクラス運営が上手くいかず大変そうだったけれど、今は毎日そのクラスに顔を出したくなる位、楽しいクラスになっています。ありがとうございました。」と御礼のことばを聞くことができた。

このレポートは彼女が産休に入る前の2008年3月末に提出していただいた。イタズラ村合宿を体験し「遊び師養成講座」で学んだ成果がこの実践である。この実践は典型的な「遊び力・子ども力」という考えに基づいたものだ。名人芸という授業でなくても「子ども力・遊び力」を学んで身につけることができれば誰でもができる教育実践である。

前述したように「かわいがりずむ」とは筆者の造語である。「かわいいと思う」気持ちは人間的に奥深いもの。子どもが「かわいい」と思えるようになるにはどうすればよいのか、その時以来考えてきた。NPOを創設して、「指導」という立場から退いて、「遊ぶ」ことを基軸にゆったり活動する中で見えてきたのである。その答えは「子どもイタズラ村」でたっぷり子どもと遊んでいるときに感じる事ができた「かわいさ」の情景にあった。子どもたちが遊んでいるときに見せるイタズラっぽい目、けんかしている時の顔、

悔しくて流す涙、嬉しくて見せた笑顔…。大人が子どもと一緒に遊んで、子どもの「かわいさ」を引き出せば良いんだ…。H・Mさんはまさにイタズラ村の門を叩き、「一緒に遊ぶ」体験することで「かわいがりずむ」の精神を学んだ。「発達障害」と呼ばれる子どもたちを教育現場では、マニュアル通りに子どもを操作する「行動主義的」指導や、「薬漬け」医療との連携が横行している。H・Mさんような子どもに寄り添う教師の手による身近な人による「ケア」が必要とされる時代なのだ。

(4)「遊び力・子ども力」支援で家族が変わる

「遊びのワークショップ付き子育て支援講演」を聴いたお母さんたちのレポートだ。親が子どもと一緒に遊ぶことで子どもはあつという間に変身し、家庭が変わる。一人ひとりが優しくなれる。

□父と娘は抱き合って喜ぶ

内容の充実した講演で参加してよかったです。皿を買って家に帰ると、小学1年生の娘は興味を持ってやり始め15分くらいでできるようになりました。夜に父が帰ってきたので、娘は自慢げに見せようとしたのですが、どうしても上手く回らず悔しくて泣き出してしまいました。家族全員で応援して見守りました。焦りでなかなか成功せず、それでも真剣に回そうとする姿に感動しました。そして、30分後によく回すことができました。父と娘は抱き合って喜びました。今後とも子どもと向き合って、子育てをがんばっていきたいと思いました。

□親子遊びのレッスンで胸がいっぱいに

大変心に残る講演をありがとうございました。一番心を揺さぶられたのは、子どもを「赤ちゃんに戻らせる」レッスンでした。ライトが消され、「今からみんな赤ちゃんになって良いよ」と先生が言われ、わが子が生まれたばかりの瞬間にタイムスリップしました。おっぱいをあげて、寝顔を1日中見ても飽きず、わが子を命のかたまりだなーと思って、幸せな気分だった時代を思い出しました。ずいぶんでかくなつたなー。何も変わらないのに、最近の私はいつも子どもに怒ってばかりだなー。いろんなことが頭を巡って胸がいっぱいになりました。子どもが赤ちゃんになって抱っこされる顔は本当に嬉しそうな表情でした。

□お父さんが変わった！

講演会には主人も参加させていただきました。私や子どもよりも主人がとても変わりました。今までは、子どもの遊びにただ付き合っているだけ、見ていただけだったのが、一緒に笑い、楽しみ、みんなで遊べるようになりました。仕事上ほとんど家を留守にしてい

なのですが、一緒に遊ぶ時間が多くなって、自然と私も子どもも笑顔でいる時間が多くなりました。たっぷり子どもと遊ぶように心がけるようになったら、子どもの方から、「ママがお片づけ終わってから遊ぼうね。」と私を気遣うようなことを言ってくれるようになりました。今までは家事をしようとしても、すぐに「早くー」「こっちきてよ」とわざと家事をさせないように仕向けるようなことばかり言って私を困らせていましたが、不思議と子どもの方から家事をする時間を貰えるようになりました。

□主人が中級の皿を回せた！

主人が中級の皿を回せるようになったので、初級も中級も買って帰りました。(略)中級が回せるようになった主人は子どもに自慢げに披露し、どちらが大人で子どもかわからない位でした。そういう経験ができたことで、子どもとの遊び方、子どもが遊びから得る喜びや学びを見つけることができました。最近では子どもが「お父さんと遊ぶの楽しい！」といて、私と遊んでくれません。私も負けずに遊びにどんどん参加していきたいです。私の実家に遊びに行ったときに、皿回して遊んだら、じいちゃんもばあちゃんもみんなが遊びの虜でした。この皿回しをきっかけに遊びの輪が大きくなりました。今回は早川先生の講演を聴けて本当によかったです。このような機会を作ってくださった幼稚園にも感謝です。ありがとうございました。

□母に抱っこしてもらった記憶がない私が…娘にも

(略)抱きしめられた記憶がない私は3人姉弟の一番上で、弟たちに手がかかるため、仕方なかったのだと思います。早川先生の講演を聞いて、私の娘との接し方にハッとさせられました。私は一番上の娘に対して、抱きしめるところか、「○○手伝って！」とか「○○して！」と下の子の世話を頼んだり、大人と同等に接し甘えさせていませんでした。(略)「おかあさん、ぼくは今日まだ一回も抱っこされてないよ」(富田富士也・作)という言葉が娘の悲鳴のように感じ、涙が出そうになりました。娘はまだ5歳。たくさんたくさん甘えたい年齢のはずです。これからは娘をもっと抱きしめ、この先娘が困難にぶつかった時『お母さん苦しいよ！』と素直にうち明けて貰えるような親子関係を築きたいと思います。とても勉強になる講演会ありがとうございました。

□発達に悩んでばかり…自分を変えることから始めよう！

子どもの発達に悩みのある私にとって、「親が変われば(遊べば)子どもが変わる」という先生の言葉はとてもよい励みになりました。ふさぎ込んでばかりい

ないで、まず抱っこしよう！身体を動かして笑い合おう！と思えるようになりました。主人とは喧嘩も多かったけれど、一日に一回主人を笑わせるぞ！三人で笑おうと。悩むのは子どもが寝てから。発達の本を読んでばかりいても、子どもに寄り添い見つめていなければ意味がありませんね。機会があったら、また勉強して変わりたいです。

□発達障害ではないかと悩んでいたけれど遊び仲間ができて劇的変化！

小学1年生になったばかりの息子が、発達障害ではないかと言われ、涙の日々を過ごしました。(略)息子を救ってくれたのは友だちでした。友だちと遊ぶという時間を作ってあげられず、家に閉じこめていたせいで、息子ののびのびとした感情を潰していたのだと思います。3年生になって、友だちがどんどん(強引に?)来てくれるようになり劇的に変化しました。全てが動き出したのがわかりました。夢中になって遊ぶことが、子どもの人間形成にどれだけ大切かその時気付きました。講演会ではまだまだ育児を頭で考えていたのですが、単純に、手をつないで膝に乗せて話す、聞く、目を見る。これで良いのだと教わりました。これからの財産になりました。

追伸 私の弟(独身)が家に来る度に汗だくで遊んでくれます。

□私の育児バロメータは、「ぎゅーっ足りてる？」

わが家では、下の子が生まれてから、年長のお兄ちゃんに「ぎゅーっ足りてる？」と聞くようにしています。すると、「たりてない！」といて、私の所へ飛び込んでくるので、そのときは下の子に「今はお兄ちゃんの時間」、お兄ちゃんを抱きしめてあげます。しばらくすると満たされた顔で、自然に離れていきます。(略)

□友人の子どもが不登校になって考えたこと

先生のお話を聴いて、先生の本を読んで、あれを試してみたいとか、話しをしたい、と何人かの子とそのお母さんたちのことを思い浮かべました。この春入学し、しばらくして学校に行けなくなった子がいます。お母さんたちは目の前の大きな問題に思い悩んで、涙混じりで話しました。自分の息子と同年で、同じ幼稚園やプールで過ごしてきた子たちです。学校はちがっても他人事とは思えませんし、いつか自分たちも直面するかもしれません。そして、学校へ入学して一番変わったことは何かと考えると、それは、遊び時間が減ったことだと思います。(略…)学校の中でも家庭でも遊び時間がなくなっている実態があり、これでは子どもの心の電池がきれて不登校になるのも当然だと思います。

わが家ではどんなことでも遊びになると考え実践しています。「せんとくものたたみだい」と3歳の息子が言いました。「あら、お手伝いしてくれるの？ありがとう」と言いながら、息子の表情を見てハッとしました。息子はそれをお手伝いだとは思っているわけではないのです。「ママがやっていることを、ボクもやってみたい」だけなのです。(略)一緒にやっているうちに息子は洗濯物で遊び始めました。形の違うものでグループ分けしたり、積み上げたタオルの山を崩して笑ったりしているのです。「仕事だって一緒に楽しめば遊びになる」と気づきました。仕事や家事に一日の大半がとられる、何でも一緒に取り組んで、一緒に笑って、一緒に興奮して、一緒に遊ぶことを増やそう！先生のお話のことや、私の思いを、家族や悩んでいる両親、職場の人や友人、できるだけたくさんの人に伝えたいと思います。最後ですが、皿回し先生の笑顔の輪がどんどん広がりますようにお祈りします。

□できないとかんしゃくを起こす息子が

家に帰るといつもテレビゲームを始める息子(6歳)に、皿を買って帰りました。何度やっても上手くいかず、回せるようになるまで2時間位はかかりました。もともと感情の激しい子ですが、泣きじゃくりながら、がんばっていました。回せるようになったときは晴れやかな顔をしていました。何でもすぐにできないとかんしゃくを起こす彼ですが、何度も練習してやっどできるようになるんだと、体感してくれたのではないかと思います。(翌日、また回せなくなり、怒って棒を折ってしまいましたが、よい経験になったと思います。ありがとうございます。)

□小学校5年生になってもだっこが大好き！

わが家には小5の息子がいます。昔から甘えん坊です。夏休みに入ってから特に、私にくっついて来ます。「ママはオレの充電器なんだぜ。今日は3点充電だ。」といい、私に「手」と「足」と「頭」をくっつけて、抱きついてきます。「これで30分充電完了」といって終わります。私は身体も大きい息子がそうしてくると、つつい「早く終わってよ」と少し嫌がっていましたが、今日のお話しを伺って、これからも「ぎゅう！」と抱っこをしてやろうと思います。

□子どもへの“怒り”を鎮めた“抱っこ”

怒らない子育てをしたいと思っています。しかし、1週間に1回のペースで娘のわがままに対して怒りのコントロールができなくなり、言い過ぎてしまいます。講演のあった日も家で、娘が何かがきっかけで憎まれ口をたたき、あげくに弟を叩きました。私も怒りの感情が湧いてきましたが、講演での先生の話の思いだし、

とりあえず娘を抱き上げてぎゅっと抱きしめました。すると、娘の表情が一瞬のうちに和らぎました。と同時に自分の高ぶっていた感情も不思議に落ち着きました。抱っこするだけで、こんなに気持ち楽になるのかと新しい発見でした。

□子どもと「一緒に」が大切なことに気付きました

私の子どもは言葉の発達が遅く、「集団生活をする」ことで、いろんな刺激を受けて、早くおしゃべりできるのではないかと期待して、未満児さんのクラスから入園したものの、期待した程の成果はみられませんでした。現在は幼稚園とは別に発達支援センターに通い始めようかという所です。幼稚園や発達支援センターに頼るだけではなく、家庭で何かできることはないかと考え、子どもが興味を持つことは積極的にやらせてはいるのですが、アイデアが思い浮かばなくなって、悩んでいるときに今回の講演を聞きました。皿回しは、思いの外楽しくて童心に返った感じがしました。「これを子どもと一緒にやれたら楽しいだろうな」と思いました。「子どもと一緒に親子で遊ぶ…というのは子どもにもの凄く刺激になるのではないか？」そう考えさせられた講演会でした。

後日、子どもと公園に行った時に、一緒にブランコに乗りました。最初、1人で乗っていても楽しそうにしていたのですが、「ママも」と私が隣のブランコに乗ると凄く嬉しそうな顔をしました。それを見て、やっぱり“一緒に！”というのは大切なんだなと思えました。今までは、外で遊んでいる時は見ているだけ、アパートに住んでいることもあってなるべく静かにしていないと…子どもと遊ぶ機会が少なかったのかなと、思いました。今後は私も楽しく遊べるものを探して、『子どもと一緒に遊ぶ』を増やしていきます。

考察

「遊び」(一緒に遊ぶ)を三項関係の一項に変えてみる！という筆者の提案が、様々な家族のナラティブを作っていることが実証されていることが分かる。「遊び」とは、「皿回し」であり、「赤ちゃん返り(レッスン)」であり、「ぎゅっ」である。それぞれの家庭によって「遊び」は違うが、自然な形で「間主観性」や「甘え」や「安全基地」が形成されている。「お父さんが変わった」のナラティブの中には、素敵な「間主観的交流」が描かれている。「ママ片付け終わったら…」とママを気遣いする子どものけなげな心に感動する。「抱きしめられた記憶がない私」では、子どもの「甘え」の大切さに気づく母の愛に感動する。「友人の子どもが不登校になって考えたこと」には、地域の「安全基地」になろうと実践するお母さんのナラティブがある。



総会フォーラムのメインホールが、皿回しの遊びの渦に！

「発達障害」、「虐待」、「不登校」などの困難な課題に、母たち父たちの「遊びケア」が見られる。子どもたちは、「遊び」が暮らしの中心になり、家族が「安全基地」になっていくことを望んでいるのに違いない。

おわりに

筆者には力強い「相棒」がいる。「皿回し」という「遊び」である。今大会でも多くの先生方に楽しんで貰えたと思う。しかし、この「皿回し」は、よく「なぜ皿回し?」、「他の遊びじゃダメなの?」、「(皿回しという)モノを使わない方法はないの…」と言う質問がたびたび寄せられ、答えに窮するときがある。今大会に参加した赤平幸子氏(弘前市・城東こどもクリニック&病児保育室「ことりの森」看護師長)に、そのことに言及して感想を寄せていただいた。

早川実践は、実は『モノ』が中心ではなく、イタズラおもちゃで遊ぶことによる、『ねらった笑いではなく、意識下にもない真の心の響き合い=間主観的交流』が起こり、親しみのある温かな交流が始まるということなんだなと思ってしまいました。皿回しはきっかけであり、しゃべるのが苦手な人でも、コミュニケーションが不得意な人でも、本心からやっていて楽しい、『次は回すぞ!、回ってね!』と思うと、その思いが、周りに伝わって、見ている人も同じ気持ちになる。不思議に一次主観性・二次主観性(トレヴァーセン(Trevarthen, c.)は、情動的な一体関係が成り立つ一次的間主観性と、相手の意図を把握する二次的間主観性を区別した。)が響き合っていることが観察してよく分かります。

(※赤平氏は筆者の講演を何度か聞いており、今大会では、周囲の人がどのようにワークショップを楽しん

でいるかを「観察」する立場に徹しようと思っていたという。)

「皿回し遊びワークショップ」は、「皿を回す」という奇抜な行為にばかり視線が向きがちで、その本質が理解されないこともある。「何で皿なんか回さなくてはいけないの」という大人としての(?)プライドからくる拒否や違和感が、理解されない原因だと思う。

しかし、赤平氏は「皿回し遊びワークショップ」を行う中で、「間主観的交流」が生まれると感じた。そして、「心のケアに関わる」仕事をする人には「皿回し遊びワークショップ」のような体験が必要だとも提言している。一緒に遊ぶことで人との心の交流が行われ、関係性に変化が表れ、新しい関係ができる。そして、ナラティブが生まれる。「皿回し遊びワークショップ」は、大人に「遊び力・子ども力」を蘇らせる最高のツールであり、最高のシステムなのだ。

最後に、なぜ皿回しなのかについて触れる。「セレンディピティー」とは、簡単に言うと「偶然からモノを見つけだす能力」ということになる。「大きな発見は偶然から生まれる例が多い。それを見つける幸運をセレンディピティーと呼ぶ。チャンスは誰に対しても平等で、セレンディピティーにできるかどうかは、注意深く努力する精神と自然を謙虚に受け止めて考える姿勢によると感じる。そんな人に女神が微笑むのではないか。」(日本経済新聞コラム)と書かれてあった。筆者はこれまで40年間、子どもと遊び、「どこかに楽しいおもちゃはないか?遊びはないか?」と、アンテナを張り巡らせて生きてきた。そこで発見したのが「皿回し遊び」だ。これまで2万5千枚の皿を普及・販売してきた。NPOの存続にとっては必須の要素であるとともに、筆者にとって特別な相棒なのだ。